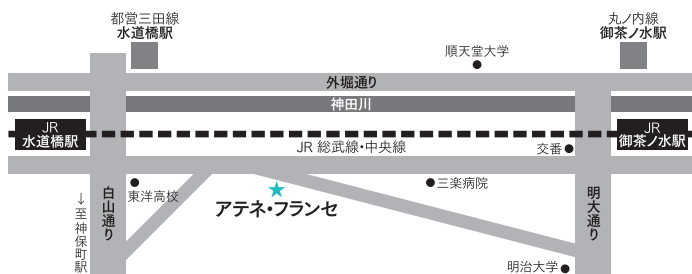


Calendar

6/11(土)	14:00	江戸川乱歩の陰獣
	16:30	カナリア
	19:00	オープニングトーク「ポストメジャースタジオ時代の日本映画を考える」
6/13(月)	16:15	バンク侍、斬られて候
	19:00	愛について、東京
6/14(火)	14:45	ラブホテル
	16:45	バンク侍、斬られて候
	19:00	トーク「動画配信サービスは日本の映画製作にどのような影響を及ぼすか？」
6/15(水)	15:00	愛について、東京
	17:30	ラブホテル
	19:00	トーク「日活ロマンポルノにおけるプロデューサーの役割と軌跡」
6/16(木)	14:30	炎と女
	16:45	鏡の女たち
	19:00	トーク「歴史・記憶・女性像」
6/17(金)	13:30	皇帝のいない八月
	16:00	トーク「多中心的世界におけるプロパガンダ活動としての『自衛隊協力映画』」
	18:00	典座—TENZO
	19:10	クロージングトーク「2020年以降の日本映画の展望」

※トークは本特集のチケットをお持ちの方はご入場になれます。
※先着順/入替制(整理券は当日初回の20分前から販売いたします)

[入場料] 1回券: 一般 1,200円/学生・シニア 1,000円
アンスティチュ・フランセ、アテネ・フランセ文化センター会員、映画美学校生 800円
2回券: 一般・学生・シニア 1,600円
全作品(9作品)鑑賞券: 一般・学生・シニア・会員共通 5,000円



[会場&お問合せ]
アテネ・フランセ文化センター(御茶ノ水)

東京都千代田区神田駿河台2-11 アテネ・フランセ4階
(JR/地下鉄 御茶ノ水・水道橋駅より徒歩7分)

TEL.03(3291)4339(13:00-20:00)
<http://www.athenee.net/culturalcenter/>
Email: infor@athenee.net

新型コロナウイルスの感染状況により、席数の制限をさせていただく場合がございます。
上映前日にホームページでご確認いただくか、お問合せ下さい。(アテネ・フランセ文化センター)

『Ebisu』第59号
「鏡の映画たち: 日本映画の40年(1980年~2020年)」
Ebisu
"Films en miroir. Quarante ans de cinéma au Japon (1980-2020)",
n°59, 2022.

Films en miroir

Quarante ans de cinéma au Japon (1980-2020)

世界の中の日本映画——フランスの視点から
ポストメジャースタジオ時代の日本映画(1980-2020)を考える



フランス日本研究所・日仏会館が発行する雑誌「Ebisu」の59号は「ポストメジャースタジオ時代の日本映画」をテーマに、フランスの気鋭の研究者たちが1980年から2020年までの日本映画をテーマに論考を執筆している。本特集は、そこで言及されたテーマを、作品上映・トークセッションを通して更に深化発展させる試みである。

トーク
① 6/11(土) 19:00 オープニングトーク「ポストメジャースタジオ時代の日本映画を考える」 ●塩田明彦 ●マチュー・カベル
② 6/14(火) 19:00 「動画配信サービスは日本の映画製作にどのような影響を及ぼすか？」 ●横田ラファエル
③ 6/15(水) 19:00 「日活ロマンポルノにおけるプロデューサーの役割と軌跡」 ●ディミトリ・イアンニ
④ 6/16(木) 19:00 「歴史・記憶・女性像」 ●木下千花 ●マチュー・カベル
⑤ 6/17(金) 16:00 「多中心的世界におけるプロパガンダ活動としての『自衛隊協力映画』」 ●ファビアン・カルバントラ
⑥ 6/17(金) 19:10 クロージنگトーク「2020年以降の日本映画の展望」 ●富田克也 ●相澤虎之助 ●ファビアン・カルバントラ ●マチュー・カベル

登壇者：塩田明彦(映画監督) 〓 横田ラファエル(映画研究者/国立東洋文化学院博士課程)
ディミトリ・イアンニ(映画研究者/「キノタヨ映画祭」選考委員長) 〓 木下千花(映画研究者/京都大学教授)
ファビアン・カルバントラ(映画研究者/横浜国立大学准教授) 〓 富田克也(映画監督) 〓 相澤虎之助(脚本家・映画監督)
マチュー・カベル(映画研究者/東京大学准教授)
司会:坂本安美(アンスティチュ・フランセ日本映画プログラム主任) (①・④・⑥のみ)

※本特集は、東京大学准教授のファビアン・カルバントラによるインタビューをまとめたものである。

上映作品 (製作年順・青色の作品解説は、マチュー・カベルによる)

炎と女 [1967年/102分/35mm]



© 1967松竹株式会社

監督:吉田喜重
出演:岡田茉莉子、木村功、小川真由美、日下武史、細川俊之、北村和夫

人工授精をテーマに、斬新かつ洗練された画面構成で描かれた心理サスペンス。人工授精で生まれた男の子を育てる夫婦の元に、その子の生物学上の父親だと思われる男が現れる。

人工授精をテーマとして取り上げた吉田喜重は、その2年前の「水で書かれた物語」から始まった「アンチ・メロドラマ」の作品を作り続けている。パートナーである岡田茉莉子を撮ることで女性の性を問いつけている一方で、映画の根幹(映像や出会い)さえも問い直す手法が、(本作を)彼の最も野心的で完成度の高い作品のひとつとしている。

江戸川乱歩の陰獣 [1977年/118分/35mm]



© 1977松竹株式会社

監督:加藤泰
出演:あおい輝彦、香川美子、大友柳太朗、若山富三郎、川津祐介

江戸川乱歩の小説『陰獣』の映画化。本格推理小説家による殺人事件の謎解きを描く。

4年ぶりに加藤泰が撮った1977年の(加藤の)後期作品の一つが、実際のところ80年代初期の作品の一つだったとしたら? スリラーとして構想された「江戸川乱歩の陰獣」は、蓮實重彦が当時述べたように「単眼の世界」を展開し、通常行われるはずの警察捜査は排除され、普段なら暗闇の奥深くにあるものに光が当てられ表面化している。

皇帝のいない八月 [1978年/140分/35mm]



© 1978松竹株式会社

監督:山本薩夫
出演:渡瀬恒彦、吉永小百合、三國連太郎、高橋悦史、山本圭

小林久三の同名小説を映画化。東京に向かうブルートレインの中で進む一部の自衛隊員によるクーデター計画と事態の収拾に乗り出す政府の駆け引きを描く。

『皇帝のいない八月』で自衛隊は危険な軍事組織として描かれ、その協力を得ることなく製作された。現代社会において、このような映画を作るにあたっての検閲や法的な問題は存在しない。しかし、今日の多中心的主義的な情勢の中でもなお、このような作品の製作は可能なのだろうか?

ラブホテル [1985年/88分/35mm]



© 日活

監督:相米慎二
出演:速水典子、寺田農、志水季里子、益富信孝、中川梨絵

人生に絶望し、ホテル嬢と無理心中を図ろうとした男。2年後、ふたりはタクシーの運転手と客として偶然に再会する。後期ロマンポルノを代表する作品。

相米慎二が一週間もかけずに撮影した『ラブホテル』は、日活によるロマンポルノの中でも最高傑作の一つとされており、ポストスタジオ時代の日本映画におけるプロデューサー成田尚哉の重要性を間接的に示している。

愛について、東京 [1993年/113分/35mm/英語字幕付き]



© 「愛について、東京」制作委員会

監督:柳町光男
出演:ウー・シャオトン、岡坂あすか、藤岡弘、戸川純、今井雅之

東京を舞台に、中国人留学生と日本育ちの中国人少女、パチンコ店を経営する元ヤクザの奇妙な三角関係を描く。

貧困と詐欺、出自による差別。柳町光男は自身の第6作目で、大島から今村、土本から小川まで、1960年代に最も批判的で鋭い映画を生み出したテーマを再び取り上げた。しかし、柳町が彼らの最も優れた後継者の一人であるのは間違いないとして、彼は何よりもジョルジョ・アガンベンが定義する「自分の生きる時代が孕む闇を顔いっぱいを受け止める」あの「同時代人」なのである。

鏡の女たち [2002年/129分/35mm/英語字幕付き]



© 現代映画社

監督:吉田喜重
出演:岡田茉莉子、田中好子、一色紗英、山本未来、室田日出男

24年前に失踪した娘の突然の帰還。彼女は記憶喪失者だった。三代の母子は導かれるように広島に向かう。ミステリアスな設定に突如浮上する原爆の記憶を暗喩に満ちた話法で描いた女性映画。

吉田喜重監督の最新作は、映画というメディアの条件と限界、あるいは捉えがたいものや表現できないものに付きまどわれた映画の一世紀にわたる集大成を感動的な演出で提案している。

カナリア [2004年/132分/35mm]



© 2004「カナリア」パートナーズ

監督:塩田明彦
出演:石田法嗣、谷村美月、西島秀俊、甲田益也子、りょう

テロ事件を起こしたカルト教団から保護された光一は、幼い妹を取り戻すために施設を抜け出し東京を目指す。

『カナリア』はロード・ムーヴィーだ。しかし、1960年代以降の多くのロード・ムーヴィーが、我々の自由に課せられた限界を認識すること(大島渚)や、原初なる日本を目指すこと(今村昌平)であったのに対し、この主人公の旅は現代の廢墟への彷徨であり、どんな過去や伝統とも再び結びつくことがない表層を迎える純粋な痕跡のようなものである。

パンク侍、斬られて候 [2019年/131分/DCP]



© イイベックス通信放送

監督:石井岳龍
出演:綾野剛、北川景子、東出昌大、染谷将太、浅野忠信

町田康による異色時代小説の映画化。とある藩に仕官するために浪人がかましたハツリが引き起こす大騒動の顛末とは…?

2004年当時「映画化不可能」とされていた小説を(石井聰互の名でサイバーパンク映画の急先鋒として知られる)石井岳龍が映画化した『パンク侍、斬られて候』は、東映の協力のもと日本国内300館で公開された後に、dTVの独占コンテンツとして配信されるなど、ハイブリッドな形で配給が行われた。

典座—TENZO [2019年/60分/DCP/英語字幕付き]



© 空旗

監督:富田克也
出演:河口智賢、近藤真弘、倉島隆行、青山俊董

3・11後の現代日本における仏教の意義、また信仰とは何かを曹洞宗の若き僧侶の姿を映したドキュメンタリーとフィクションを交えて探求する。

『サウダーチ』や『バンコクナイツ』などの尺の長い作品の後では『典座—TENZO』は富田克也のフィルモグラフィーをほぼ逸脱したような地味な存在に思えるかもしれない。しかし、本作は処女作『雲の上』の登場人物を再発見することで、その一貫性を明確にしているだけでなく、ハイブリッドで実験的な形式を通して、この映画監督が獲得した大きな自由を証明している。